様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１９８０

研究課題名（和文）サービス・ラーニングを通じた「地域社会と教育困難校の連携」に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the "Collaboration between the Local Community and School with Educational Difficulties" through Service Learning

研究代表者
大束　貢生（Otsuka, Takao）

佛教大学・社会学部・准教授

研究者番号：２０３５１３０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：地域社会と教育困難校の連携による教科「人間と社会」の運営や生徒の成長についての調査から、地域社会と教育困難校の連携を取り持つ地域中間支援団体のサポートの程度が教科「人間と社会」の運営、さらには生徒の成長に影響することを明らかにした。一方コロナ禍によって教科「人間と社会」の体験活動の中止や生徒受け入れ団体の活動中断・縮小により調査が続行できない状況になった。その結果、当初考えていた生徒・学校・地域社会の長期的な効果、さらには連携による効果が検討できない状態となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、中等教育機関である高等学校において必修科目「人間と社会」でのサービス・ラーニングによって教育困難校の生徒にも肯定的な影響がみられるのかを検討している。さらに生徒が社会で生きる力を身につけ、学校が地域社会と協働し、地域社会は「私たちの学校」として学校と共生する相乗効果を生み出すことを提示し「地域とともにある学校づくり」の多様な可能性を提示した。

研究成果の概要（英文）：The study on the operation of the subject "Human and Society" and the development of students through collaboration between local communities and schools with educational difficulties revealed that the support of local intermediary support organizations, which mediate the collaboration between local communities and these schools, impacts the operation of the subject, and furthermore, the development of students. However, due to the COVID-19 pandemic, the field experience for the subject were suspended, and the organizations that accept students interrupted or scaled back their activities, made it impossible to continue our research. As a result, the initially anticipated long-term impacts on students, schools, and the local community have not been examined, as well as the impacts of partnerships.

研究分野：社会学

キーワード：サービス・ラーニング　教育困難校　学校と地域の連携　学校の変容　生徒の学びの変容　生徒受け入れ団体の変容　中間支援団体　コロナ禍

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2007 年度に全東京都立高等学校において必修教科「奉仕」が開始された。これは日本におけるサービス・ラーニング（以下 SL）展開の歴史において画期をなすことである。教育と実践を有機的に結合するコーポラティブ教育の一形態としてアメリカで始められた SL は、日本では高等教育機関である大学において正課外や選択科目として導入された。しかし必修科目であり受講生の人数規模が巨大である点で、都立高校における展開はまったく次元を異にするものである。2016 年度には東京都教育委員会が教科「奉仕」を防災教育や道徳教育を含む教科「人間と社会」に発展させたことを踏まえ、中等教育における SL の可能性について検討したい。

２．研究の目的

本研究の目的は、教育困難校における教科「人間と社会」において、地域社会と学校が連携することによる生徒の成長について、インタビュー及び質問紙調査と参与観察によって実証的に検討することにある。

３．研究の方法

教育困難校での教科「人間と社会」の影響について、地域社会・生徒・学校への影響を質問紙調査とインタビュー、参与観察によって明らかにする。

第一に、地域社会が、生徒の活動を受け入れることによって、どのように学校と連携しているのか、また連携することを目指しているのかについて明らかにする。教育困難校は「問題を抱える生徒」が学ぶ高校とみなされ地域社会から「厄介もの」「迷惑施設」とされてきた経緯がある。地域社会は生徒が活動を行うことをどのようにみているのか、また生徒を受け入れることによる問題点は何か、学校との連携の方法について検討を行う。

第二に、学校は、地域社会と連携してどのように教科「人間と社会」を運営しているのかについて明らかにする。教科「人間と社会」では、生徒の体験活動を受け入れる地域社会との連携が必要である。学校はこれまで教職員と生徒との閉ざされた空間として維持されてきたために、特に教育困難校は地域社会から排除されがちであったため、地域社会との連携が難しい側面がある。教科「人間と社会」の経験が地域に開かれた学校へとつながるのかについて明らかにする。

第三に、生徒自身の教科「人間と社会」の体験活動において、学校外の人々と協働し、奉仕活動を行うことでの学びについて検討する。教科「人間と社会」での学びには短期的影響と長期的影響がある。短期的影響は第一学年の教科「人間と社会」履修開始時と終了時の生徒の意識の変化を、長期的影響は最終年次の意識の変化を分析する。先行した教員インタビューによれば「問題を抱える」生徒の学びについて「社会に役立つ喜び」「認められることによる自信」「規範意識や公共心の育成」「地域に貢献する行動」ことをあげた。地域社会と学校の連携が、生徒へのより効果的な影響をもたらすのかどうかを明らかにする。

４．研究成果

地域社会と教育困難校の連携による教科「人間と社会」の運営や生徒の成長についての調査から、地域社会と教育困難校の連携を取り持つ地域中間支援団体のサポートの程度が教科「人間と社会」の運営、さらには生徒の成長に影響することを明らかにした。一方コロナ禍によって教科「人間と社会」の体験活動の中止や生徒受け入れ団体の活動中断・縮小により調査が続行できない状況になった。その結果、当初考えていた生徒・学校・地域社会の長期的な効果、さらには連携による効果が検討できない状態となった。

（1）地域社会で生徒を受け入れる団体がいかなるメリット・恩恵を得ているのかについて、受け入れ団体に対するインタビューから検討した結果、A 高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵については「啓発活動の充足」「活動のメリハリ」「精神的な充実感」が語られた。生徒受け入れに対する思いについては高校からの働きかけが弱いこともあり、生徒の成長が分からず実習に来た生徒の様子で判断している。対して B 高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵は「多様な人々に活動を知ってもらう」ことである。活動を知ってもらうことで生徒受け入れ団体は「私たちが想像できなかった多様性が期待でき」それは「まちや地域のつながりを創る」というメリット・恩恵につながっている。こうした A・B 高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵の違いは、高校と生徒受け入れ団体をつなぐ中間支援団体の存在によることが大きい。A 高校の中間支援団体は当初に団体を紹介した以上の積極性はみせておらず、高校と生徒受け入れ団体との議論の場を提供していることにとどまっている。対して B 高校の中間支援団体は高校と地域の受け入れ団体との橋渡し役として高校と受け入れ団体による会合を年に複数回持ち積極的に活動を行っている。つまり中間支援団体の活動が，両高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵の差に表れていることが示唆される。中間支援団体が生徒受け入れ団体と高校との間でどのような活動を行うかが、生徒受け入れ団体のメリット・恩恵に関与し、高校と生徒受け入れ団体を含む新たな地域ネットワークや絆の創出を生み出すことが示唆される。

（2）生徒の学びを促す学校と地域との連携について C 高校定時制課程の教科「人間と社会」の参与観察及び教科「人間と社会」担当教員、生徒・受け入れ団体インタビューから検討を行った。C 高校定時制課程に学ぶ生徒は小中学校時代に不登校であった生徒も多く、高校は教科の学び直しだけではなく、友人関係といった人間関係を再構築し、学校生活を「学び直す」場であった。その中で、教科「人間と社会」の体験学習によって生徒は学習に関する積極的な姿勢を生み出している。それは地域の受け入れ団体の協力によって教科「人間と社会」の体験学習を実施することで、生徒に学校や家庭以外での大人たちとの出会いの場、異世代交流を結果的に提供する。こうした場での学校や家庭以外の大人たちからの肯定的な評価は、学校内での教員や上級生の励ましと相まって、自己充実感や自己肯定感につながり、対人関係能力や自己表現力を身につけることに関係している。

（3）2020 年度にコロナ禍で各高校の学校外での活動は全面的に中止となり、地域社会と学校の連携の様相の違いによる生徒の長期的な成長について調査ができない状態となった。その後 2 年間科研費助成の延長を行い各高校の活動再開を待ったが、2023 年度においても学校外での活動は制限されたままである。一方、地域社会においても、コロナ禍による生徒受け入れ団体が活動停止し、さらには解散した団体もあり、地域社会のつながりの弱体化が顕著になっている。その中で 2021 年度に A・B 高校の教科「人間と社会」担当教員にインタビュー調査を行い、教科「人間と社会」内の SL がコロナ禍によりどのように変化したのかについて考察した。結果、①両高校ともコロナ禍で地域の学外の生徒受け入れ団体と連絡が取りにくくなったこと、②B 高校では調べ学習により例年と変わらない学びになったと語るのに対して、A 高校では体験学習を教員が行ったが学びの質は変化したと推測されること、③コロナ禍によって地域の学外の生徒受け入れ団体との関係の仕組みの構築や、教員団の学習マネジメントの確立が必要と考えていることをまとめた。

（4）コロナ禍以降の教科「人間と社会」の生徒の学びについて調べるために B 高校の生徒に活動開始前と活動開始後にアンケートを行い、コロナ禍以前とコロナ禍以降の比較を行った。なお B 高校では、2021 年度以降体験活動に代わって調べ学習が導入されている。コロナ禍以前と比較して生徒の意識の変化がみられたのは「チームで機能できる協調性」や「活動を通した社会の公平や平等の創造」といったことであった。他方活動が実施されなくなったことで、それまで顕著に変化する意識であった「地域社会をよくすること」は、コロナ禍以降看取されていない。具体的な地域社会の改善に資するとはどういうことなのか、という意識やイメージに与える影響については体験活動の意義が小さくないことが示唆される。ふりかえりや調べ学習による理解の深さの高群と低群との比較では、校外での活動実施時期には、高群ほど、社会の公平や平等の創造に加え、自分自身が抱える問題への気づきや解決が促されたことが示唆され、省察によって内省やいわゆる「自分事化」が促進されることが改めて確認された。こうした傾向は、調べ学習に代わって以降、途絶えてしまっている。ただし、各年度間の学習成果のちがいという点からは、統計的な有意差をもってそれらの変化を見出すことができなかった。この点については（3）で示した教科「人間と社会」担当教員に実施したインタビュー調査での、体験活動が実施されなくなったものの生徒たちの印象が変わったということは特にない旨の発言と重なり合うものでもある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 大東貢生	４．巻 47
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（24）－インタハイスクールでの活動から－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 関西教育学会年報	６．最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大東貢生	４．巻 46
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（23）－コロナ禍での教科「人間と社会」の運営から－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 関西教育学会年報	６．最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川秀夫	４．巻 62
２．論文標題 中等教育におけるサービス・ラーニングの効果性 －東京都立 K 高校での調査研究から－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 龍谷大学経営学論集	６．最初と最後の頁 79-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50873/10505	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大東貢生・富川拓	４．巻 45
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（21）－定時制高校での学びから－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西教育学会年報	６．最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柴田和子・富川拓・大東貢生・古川秀夫	4．巻 29
2．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（22） ―「人間と社会」受講による日常の生活態度や能力の変化―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 聖泉論叢	6．最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 大東貢生	4．巻 46
2．論文標題 教育機関と地域社会との連携がもたらす可能性に向けて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 佛大社会学	6．最初と最後の頁 45-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 富川拓	4．巻 44
2．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（18）―受け入れ団体からみた生徒の学び―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 関西教育学会年報	6．最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 柴田和子・富川拓・大東貢生・古川秀夫	4．巻 28
2．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（19）―「人間と社会」受講による社会体験活動イメージの変化―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 聖泉論叢	6．最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 大東貢生・柴田和子・古川秀夫・富川拓	４．巻 45
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（20）－地域社会の生徒受け入れ団体への影響について－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佛大社会学	６．最初と最後の頁 62-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大東貢生・富川拓	４．巻 43
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開(15)－定時制高校における調査から－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 関西教育学会年報	６．最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 富川 拓・大東 貢生・古川 秀夫・山田 一隆・柴田 和子	４．巻 27
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開(16)－サービス・ラーニングと地域連携・社会連携との関連から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 聖泉論叢	６．最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大東 貢生・柴田 和子・富川 拓・古川 秀夫・山田 一隆	４．巻 44
２．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（17）－評価・道徳教育・キャリア教育との関連から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 佛大社会学	６．最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大東貢生・ 富川拓	4．巻 42
2．論文標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（14）－教科「奉仕」の長期的影響について－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 関西教育学会年報	6．最初と最後の頁 66-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 古川秀夫・山田一隆・柴田和子・富川拓・大東貢生
2．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開　（29）－COVID-19禍前と禍中における教科「人間と社会」の学習効果の相違－
3．学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第29回新潟大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 山田一隆・大東貢生・富川 拓・柴田和子・古川秀夫
2．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開　（28）－COVID-19禍前後における教科「人間と社会」の学習成果の変化－
3．学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第29回新潟大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 富川拓
2．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（27）－インターハイスクール型課外活動でのインタビュー調査から－
3．学会等名 第75回関西教育学会大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 大東貢生
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（26）－インターハイスクール型課外活動でのアンケート調査から－
３．学会等名 第75回関西教育学会大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田一隆、大東貢生、富川拓、柴田和子、古川秀夫
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（25）－論文題目の自然言語分析からみた我が国のサービス・ラーニング研究の関心の変遷　その２－
３．学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第28回こうべ大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大東貢生
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（24）　－インタースクールでの活動から－
３．学会等名 第74回関西教育学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大東貢生
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（23）　－コロナ禍での教科「人間と社会」の運営から－
３．学会等名 第73回関西教育学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大東貢生、富川拓
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（21）－定時制高校での学びから－
３．学会等名 第72回関西教育学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大東貢生、富川拓
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（22）－定時制高校での実践から－
３．学会等名 第23回日本教育実践学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 富川拓
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（17）－受け入れ団体からみた生徒の学び－
３．学会等名 関西教育学会第71回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大東貢生
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（18）－生徒を受け入れる団体のメリットとは？－
３．学会等名 関西教育学会第71回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大東貢生,山田一隆,富川拓,柴田和子,古川秀夫
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（19）－論文題目の自然言語分析からみた我が国のサービス・ラーニング研究の変遷－
３．学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会　第25回北海道大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 古川秀夫,山田一隆,大東貢生,柴田和子,富川拓
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（20）－中等教育での運用をめぐる諸問題－
３．学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第25回北海道大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大東貢生,富川拓
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（7）－定時制高校における調査を通じて－
３．学会等名 関西教育学会第70回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 富川拓,大東貢生
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（15）－エンカレッジスクールにおける調査を通じて－
３．学会等名 日本教育実践学会第21回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大東貢生,山田一隆,富川拓,柴田和子,古川秀夫
２．発表標題 日本におけるサービス・ラーニングの展開（16）－教科「人間と社会」受講生に対するアンケート調査から－
３．学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第24回あいち・なごや大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大東貢生
２．発表標題 「人間と社会」の調査・研究から分かること
３．学会等名 東京都奉仕・ボランティア教育研究会講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	古川　秀夫 (Furukawa Hideo) (10209166)	龍谷大学・国際学部・教授 (34316)	
研究分担者	富川　拓 (Tomikawa Taku) (70369627)	聖泉大学・人間学部・准教授 (34203)	
研究分担者	山田　一隆 (Yamada Kazutaka) (80460723)	岡山大学・地域総合研究センター・准教授 (15301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	柴田　和子 (Shibata Kazuko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関